

四国キリスト召団集会

聖書に初めて接する人のために

1989年11月13日(香川 高松)

奥田 昌道

日曜日 中学生時代の信心 大学卒業の頃 恩師 聖書の構成 聖書の時代と現代 聖書を書いた人たち さし示される世界 パンを与える パンのしるし キリストのみ思い 永遠のいのち 本物のパン 霊と肉 み心のままに 水のバプテスマ(ルカ伝) 水のバプテスマ(マタイ伝) 霊界の存在 霊界の王者キリスト ひれふし さわやかなイエス よい交わり カナでの第二のしるし ベテスダ池でのいやし いのちを与える神さま イエスしかできないみわざ 愛の生涯のきわみ 十字架への道 ゲッセマネの祈りと十字架 十字架と私 死からのいのちへ 境遇を突破する力 人間の本当の生き方 十字架のみ声 主イエスさまへの叫び 新生 あふれて止まない霊的生命 どん底での出会い 生きがいのある人生 生きている実感 霊的誕生 天界と地上の人生 信じる者 光にきたる者 みことばの音楽 いだかれてある祈り

●日曜日

私、大学の方でも、30年くらい聖書を読む会というのをしております、学生諸君に聖書の話聞いてほしく、京大にいて、私の話を聞いて、それで、もしも将来何か行き詰ったような時に、あ話を聞いていて良かったと思ひ出してくれればいいと思つて、ずっとやってきました。

日曜は日曜で京都での集会をしております。職業はと問われたら、京都大学法学部の教授で民法専攻ということになっているのですが、心の中では、日曜日の集会というものが軸になっています。大木というなら幹ですね。そこから他の色んな活動が広まり、根を下ろし、そして、また広まっていくという、そんな感じています。集会では話す立場ですから、忙しい時は負担に思うときがありますが、日曜の集会を欠かしたことはありません。

私にとって、日曜日というのはひとつの生活の節目ふしめになりました、自分の生活のゆがみなどを正すですね。ときには学生とコンパしたり、お酒を飲んで少々ひずむこともありませんが、そういう時でも、日曜日にはちゃんと軌道修正して、また新しい気持ちでいく。そんなことでやっておりまして、私はあまり固苦しい宗教的聖人なんて似合いませんので、もうごく普通の人間です。キリストも普通のお方だったと思つています。

私はスポーツも大好きですし、その他、普通の一人の人間として、実に伸び伸び生き生きやっています。

それで、人生の本当の勝負というのは、50過ぎてから、あるいは60過ぎてから、あるいは70過ぎてからと、段々あとになる程、本当の勝負というか、輝きは出てくるのだと思う。



若い時は若さにまかせて競い合っていますし、まあ無器用な人はなかなか若い時に頭角を現わすのは大変でしょうけれども、この福音の神さまの世界は実に公平にできていまして、どんなにできの悪い人間でも、喰^くらいついておりさえすれば、最後には本当に変貌してゆくのですね。

●中学生時代の信心

私はすごく神経質な人間でして、ある意味では物事をきちつきちつと考えて、ごまかしができない。ごまかして小手先で器用にということができない人間でした。それから、人に嘘^{うそ}をついたりしていることがものすごくつらい人間でした。先生にああしろと言われれば、その通りにやらないと気が済まないような人間でした。少しでも足らないと自分を責めるようなことがあり、そういう意味では小心者でした。タフな神経の持ち主が羨ましいですね。

ただ、私は信心がなかったわけではありません。母親が信じていたある神さまを勧められて心の中でいつも念じていました。入学試験の時も、法律の国家試験の時も、念じて試験に臨んでいました。何故、小さい頃に信心するようになったかといえますと、中学(旧制)になって、クラスメートとの間で衝突が起こった。中学校はいろいろな学校から来るでしよ、気負いがあるでしよ。今から思えば随分出しやばりだったなあとあります。傲慢^{ごうまん}というのか、うぬぼれというのか、自分ひとりできれば教えてやろうかとか、そんな気持ちで、何かあると自分が表へ出ていつては、クラスメートの気持ちを傷つけたんだなあと後から思いました。そんなことで、クラスメートとの間がしつくりいきませんので随分悩んだ。

それに、日頃はよく勉強していたのに、試験になるといつもつまらないミスばかりやって、かんばしくない。私がしよげこんでいたら、母親がこういう神さまを信心してるから、あんたも信心したらどうかと勧められ、素直でしたから、すぐ信心しましてね、毎朝毎晩、神だなに拝みましたよ。子供心に神だなに拝む以上、自分が清くないといけないと思いました。心がゆがんでいたり、清らかでなかったら、手を合わす資格がないと、本当にそう思い、悩みもしました。

それで、信心をしましてからは、クラスメートとの仲もうまういきましましたし、試験で失敗しなくなりました。護^{まも}られていたのだと思います。けれども、そういう信心も、大学を卒業するようになって本当の意味の社会人というか、ひとり立ちをしてゆくには、支えにならなくなった。それで行き詰まって悩んでいました。

●大学卒業の頃

成績はそこそこ良かったけれども、大学へ行くようになって、人生の悩みに苦しみました。大学を卒業してから学問するということと、人間として生きてゆくことと、それから



思春期という大変ですが、高校すぎて性的欲求なども強い時ですしね、自分の中にある泥々としたものを思います。そういうもので罪の意識が私を苦しめました。どうすれば清らかな人間になれるのだろうかと随分悩みました。

研究助手ということで大学に残っている時に、大学院に残っていた純粋なクリスチャンの方が、私の悩みを聞いて、

「キリストを信じなさい」

と言ってくれた。

その頃は結婚問題のこととか、自分の罪の問題だとか、その頃非常に落ち込んでいた日が多かったものですから、健康がすぐれない。何かといえば大学内の保健診療所へ行っては診てもらったり、薬をもらったりしていました。精神的に行き詰まってしまうとう精神科の門をくぐったこともありました。これは内科の先生が勧めたからですが、いろいろテストして下さいまして、

「あんたは物事をまじめに考えすぎる、もう少しルーズになりなさい」

と言われました。ルーズになれないで苦しんでいる人間にルーズになりなさいと言われたって、どうしようもありませんね。まあ、今だからこうやって笑って話せますけれども、当時は本当に悲壮な思いをしていました。

勉強の上ではマルキシズムとか、自分の人生と社会科学的な学問と、それから自分のやる法律学と、どういう風にかまわっていくのかが分かりません。私の学問の恩師である法律の神様のような先生ですけど、私が学生時代から本当に心服している先生のところを訪ねて訊いた。

「先生、実は私は何故学問するのか、何故法律学の勉強するのか、それが自分の人生にとってどういう意味があるのか、さっぱり分かりません、何かアドバイスを下さい」

と。そしたら、その先生が

「じゃあ、やめなさい。何のために学問をするかとか、それが自分の人生で如何なる関わりがあるかとか、そんなことが気になるようでは学問する資格はありません、やめなさい」

と。それは谷底に突き落とされたようなもんですよ。

●恩師

この世的な面では神さまがわりの存在で、尊敬し信頼していた先生でした。将来の進路を相談したのもその先生でした。「大学に残れ」と言っただけだったのも先生のアドバイスでした。その先生からいなくてもそういうことを言われまして、考えこんでしまった。その時、私は思った。



「人生の問題は自分で解決しろ。私は学問の師ではあっても人生の師ではないよ」と、そういう風に言われたのかしらと、そんな風に思いました。そしてしばらく経^たつてから、キリストにふれた。その恩師の先生はご自分の領域をご存じだったのだと思います。その時こんなことも言われました。

「学問をするには無宗教でなければならない。宗教やなんだかんだと関わるようでは学問はできない」

とも言われました。後からクリスチャンになったけれども、やめろとはおっしゃらなかった。つまり、

「変な宗教にかぶれたり、変な先入観をもって、その色メガネで学問をみてはいけない。学問は学問独自のものとして純粹に自分をそれに献^たげろ」

と、そういうご趣旨だったと思います。私がクリスチャンになった時、

「実は、私はクリスチャンになりました」

と言いましたら、

「よかったね、ただ信じるだけだよ。理屈で考えなさるなよ、ただひたむきに信じなさい」

と、そう言われました。それからまた、何年か経つて、私が学問的にもそこそ段々業績を上げてゆきました頃、他の若い弟子に対して、

「奥田君のような生き方がいいんだろうね」

とポツともらされたと聞きました。つまり、精神的な安定があり、コンスタントに、じつくり落着いて、いろいろなものに左右されない、世間がどういつているだろうかとか、お金になるだろうかとか、つまらない迷いが無くなりましたから、心身とも健^{すこ}やかにになりました。

そんなことで自己紹介的な話が長くなりましたが、私は本当にキリストというお方に、23才、大学を卒業した翌年にふれました。もちろん初めは分かりませんが、聖書をあちこち読んでも、つまづくことばかりですね、疑問ばかりです。でも、そういう中から、段々と本物のところに導かれてきて、私は今本当によかったと思っています。

●聖書の構成

今晚ひと晩のお話で皆さんが、初めて聞かれる方が、「聖書が分かった」とか、「信仰のことが分かった」だとか、「神さまのことが分かった」だとか、これは不可能ではありませんけれども、せめて入口だけでも、何か突破口というか、何か窓がスツと開いて光が差し込んでくるような、そういう思いをもつて下されば、有り難いなあと思っております。

この聖書というのは本当によくできています。私はいつも小型の新約聖書を持っていますが、もちろん旧約聖書はバックグラウンドとして大事なものであります。その旧約聖書の



根っこから新約聖書という花が咲いたわけですから、大事なわけなのですけれども、何といても直接ぶつかって行って、直接にその中から養分を吸収してくるという面では新約聖書に限ります。

新約聖書には福音書が四つあります、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという、四人の人が書いた福音書。

それから使徒行伝といまして、キリストの弟子たちが、キリストが復活された後に、キリストに遣^{つか}わされて、あちこち伝道した記録。

それから弟子たちが教会に宛てて書いた書簡、パウロ書簡、それからペテロだとか、ヨハネだとか、手紙が出てきます。ローマ書は教会に宛てた手紙ですが、手紙の形式をとりながら、信仰を体系的に論じており、神学論文といわれるほどです。

それから一番最後に黙示録、最長老であったヨハネ、キリストに一番愛されたヨハネ、この人が一番長生きしましたが、キリスト教の弾圧の時に、パトモスの島に流されて、そこで示された幻、その啓示を書いたのが最後にある黙示録。これは旧約聖書の一番、最初の創世記に照^{しょう}応^{おう}するような、創世記がアルファ(α)であるならば、黙示録はオメガ(ω)という位置づけがなされます。

聖書の時代は確かに古い時代でありますけれども、私は正直いって福音書だとか、それから使徒行伝、パウロの書簡、ヨハネの書簡、ペテロの手紙、そんなのを読んでいまして、時代のへだたりを全然感じないのです。本当に現代にピタッとあてはまるような、それだけ人間というのは変わらないのでしょうか。

●聖書の時代と現代

古代人は人間でなかったと思ったたら大間違いですよ。少なくとも歴史が始まってからの古代人、ギリシャ、ローマのあのあたりの時代、もつと前のヘブライの時代、その人たちの心の姿、魂の姿というのは今の人間とちつとも変わりません。いや今の方がもつともつと墮落して駄目になっていくでしょうね。昔の方がもつと純粹でした、ひたむきでした。そして、喜怒哀楽から、愛情も、宗教的にも、みんな今と少しも変わりません。

また、人間の悪い面も変わりません。欲だとか、罪だとか、憎^{にく}しみとか、権勢欲とか、ちつとも変わりません。もしも、現代が少し進歩したとしたら、現代の方が「みだりに人を殺したりしてはならない」ということが、かなり徹底して人間の歴史の中にしみこんできたという点が進歩だと思えますが、でも逆に核兵器だとか、その他色んな形で大量の大規模な災いをもたらす危険性はますます大きくなっていますから、その点では決して現代人は昔の人に対していばれたものではない。一方、自然科学の方はめちやくちや進歩しました。もうびつくりするほどで、神さまも驚いておられるのじゃないかと思えます。

いわゆる人として、人間としてという面で見ますと、昔の時代と今の時代と本当に少し



も変わりません。「こんなことは古代だから、あったのだろう」と思つて聖書を読んだらまちがいです。むしろ「今と同じ人間だ」と思つて読む方がスツと入れます。それから余り理屈っぽく考えないことですね。福音書でキリストのことなど書かれています。が、「これは本当にあったのだろうか」とか、そういう疑惑ぎわくをもつて読んでいますとためにならない。

たとえば聖書を読んだら、

「キリストは湖うみの上を歩いて来られた」

「子供が持つていた、たった五つのパンと二匹の魚を、五千人の人々に分かち与え、しかもみんなが食べ飽きて、残りのパンくずを集めてみたら十二の籠かご

に一杯になった」

とか、そんな話を書いてあるわけですね。理性的にはそんなことは信じられないことです。けれども、聖書はそのことをちゃんと書いています。

●聖書を書いた人たち

聖書を書いた人たちは皆命がけで書きました。自分たちはいつ殉教じゆんぎやうするか分からない。自分たちが書き残さないとキリストにかかわる事柄は永遠にもう人類の歴史から消えてしまふ。だからいろいろな伝承を頼りにしながら、また自分たちが目で見、耳で聞いたこと、それを一生懸命書いたのです。それが後にまとめられて、こういう福音書というものになりました。

文学作品などを読んだ時に非常に感心する場合があります。文学作品は歴史的な事実、あちこちで色んな事件が起こります。そういう現実が起こったでき事を、寸分たがわず羅列られつしてゆけば文学作品になるのではない。人間の中で起こっているいろんなでき事を題材にしながら、それを作家がもう一度、自分の中で再構成して、自分の胸に一番うつのものを文学作品という形で表しているのです。だからフィクションといわれます。フィクションでありながら、決してフィクションでなくて、フィクション以上の真実性をもつて、我々読む者の胸に迫ってくる。トルストイにしましても、ドストエフスキーにしましても、その他著名な作家の作品というもの、あるいは日本の場合もそうですし、何かそこに人生の真実があるからこそ我々の胸をうつわけですね。

この福音書も、結局弟子たちが、自分たちの体験したこと、自分たちの見たこと、そんなことを、後の、何年も、何十年も経った後に、それを思い起こし、記憶をたどったりしながら、こういう形で表した。それで、このようなものを書くことを通して、その人たちは本当に何を訴うえたかったか、その背後にかくされているものを我々は汲くみとらなければならぬわけなのです。

「あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公おおやけにされています。墨すみではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人



の心の板に、書きつけられた手紙です。」(コリント後3・3)

●さし示される世界

お坊さんがこんなことをおっしゃっている。

「お月さんをこう指差ゆびさしていると、人は一生懸命にこの指を見ている。ところが指じゃない。どうして指差ゆびさしているお月さんを見ないのか。指ばかり見ていても仕方ない」

と。ある意味では聖書の記述というのは指なのです。この聖書の記述が指であって、それがさし示している本当の世界、その中へ、指のさし示す方向に、自分の身をゆだねて、本物の中へ自分が吸い込まれていくと、そうした時に本当に指のさし示す目印を見たことになる。

ところが、この指の姿を見て、かつこうが悪いなとか、こつちばかり見ていても何もありません。

キリストもよく「徴しるし」ということをおっしゃいます。

「あなたがたが私のところに来たのはパンの徴をみたのではなくて、パンを食べて満腹したから、私をとらえて、『あのイエスさんを我々のものにしておけば、お腹がへつたらすぐパンをつくり出してくれる』と」

ヨハネ伝の6章にはそう書いてあるのです。

「そこで、人々はイエスのなさった徴を見て、『まさにこの人こそ、世に來れる預言者である』』と言った。イエスは人々が来て、自分を王にするために連れて行くこうとしているのを知り、ひとりでまた山に退しりぞかれた。」(ヨハネ6・14〜15)

「はつきり言っておく、あなたがたがわたしを捜しているのは徴を見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」(ヨハネ6・26)

●パンを与える

キリストは、38年も病やまいで苦しんでいた人を癒いされた。それから湖の彼方に渡って行かれた。そして、このヨハネ伝6章をみますと、

「この後イエス、ガリラヤの湖、即ちテベリヤの海に向こう側へゆき給たまうた。大いなる群衆が従ってきた、これは病める者に行い給うた徴しるしをみたからである。イエスは山に登って、弟子たちと共にそこに座し給う。時はユダヤ人の祭なる過越すざこしに近し。イエス目をあげて大いなる群衆の來きたるを見て、お弟子の一人のピリポに言い給う。『一体どこからパンを買ってきて、この人たちに食べさせたらいいんだろう』と、問い掛けなされた。これはピリポを試ためしてご



覧になった。でも、ご自分では何をしようとしておられるのかご存じでした。ピリポ答えて言う、『二百デナリ

一デナリは労働者一日の労賃と云われている。

のパンありとも、この人たちに足りましようか』と、すると、弟子の一人でシモン・ペテロの兄弟であるアンデレが言いました。『ここに一人の子供がい

ます、この子供は大麦のパン五つと小さい魚二つを持っています』。

お母さんが持つてやらしたんでしようね、イエスさまのお話を聞くのなら、お弁当を持つて行きなさいというわけでしょう。

イエス言い給う、『人々を座せしめよ』

人々をずっと列にして並ばせられました。

数はおよそ五千人だった。ここにイエス、パンをとりて謝し、座したる人々に分かち与え、また魚もそのようにして、その欲する程与え給う。人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに『少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい』と言われた。集めると人々が五つの大麦のパンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠が一杯になった。』(ヨハネ6・1～13)

●パンのしるし

このイエスのなさった姿をみて下さい。パンをとりて謝し、神さまにパンを捧げられた。パンを捧げて、天の神さまに向かって、祈られたわけです。そして、キリストは徴をなさっているのです。

「私はやがて自分の体を人々に分かち与えます。この世のパンはいくら食べても死にます、私の中にある生命は、これを本当に食べる人に生命を与えます。死んでも死なない生命、これが私の中にある生命です。これを人々に与えるようにと、あなたは私をこの地にお遣わしになりました。」

これはイエスの自覚だった。物心ついてイエスはそのような自覚をおもちになったわけです。自分は神さまから遣わされて、この地に来ている、そういう自覚をおもちだった。それで、

「私は自分の内にある生命を人々に分かち与えます。私自身を生命のパンとして人々に献げます。その時がやがてまいります。その前に、どうぞ、天の父なる神さま、今ここに見えている見える形のパン、これを割いて人々に与えますから、これを通して、あなたが私にお命じになっていることを人々に分かせて下さい。」

と。そうなのです。このパンは神さまに献げられたキリストのみ体なのです。そうやってパンを捧げて祈られて、それからパンをお割きになった。そうするとそのパンは割いても割いても無くならなかった。いくら与えても無くならなかった。科学的には、



そんなことが有り得るはずがありません。でも、そう書いてある。いくら与えても無くならなかった。キリストというお方の生命は何億の人が信じてても、そのキリストの生命というのは無くならない。無限なのです。

●キリストの思い

信じるということは単に「イエスは神の子である」という命題を信じることではない。「イエスは本当に実在したか、実在したらしい、実在したら信じる」とかいうのではないのです。「主よ！ あなたを私の中に受け入れます」

ということ。空気は吸い込まないと体の中に入りません。吸い込むのです。キリストの霊の生命が我々の中にグツと入ってくる。そうすると我々は内的に段々と変貌していくのです。

「そういう見えない生命がある。その生命を本当に受けとらなかったら、あなたがたは80、90になって老いぼれて、よぼよぼで死んでしまふ、枯れ木といっしょだ。それでいいのかね」

と。枯れ木ならまだ芽を出してくるではないか。しかし、尊い人間がですよ、せっかくの尊い人生を送って、

「晩年が寂しく、希望もなく、みんなから見捨てられて、一人寂しく死んでいく。そんなことでいいのか。元気な間に、意気盛んなときに、私の本当の生命を受けとりなさい。そうしたら外なる人は滅びていっても、その中に滅びないものが着々と築かれているよ」

と。見えないだけなのです。見えない生命が形成されていく。これがすごいのです。肉の眼、すなわち五感では感じられない。しかし、確実に存在する。

「そういう本当の世界がある。実は私はその世界からやってきたのだ。私だけは天に昇ったことがある。また天から降ってきた。この世の人たちはそれを知らない。また直接にそのことを話しても受け入れない」

と。だから、いろいろな徴をもつて顕わされた。いろいろなたとえ話で話す他ない。そしてこのパンの徴をなさったわけです。本当に、

「私を食べなさい、私の血を飲みなさい、私の肉を喰らいなさい。そうしたら生命があるよ、そうしなければ、あなたがたは死んでしまふよ」

と書いてあります。けれども、

「その言葉を聞いて弟子たちも躓いて去って行った」

と6章の終わりの方に書いてあります。



●永遠のいのち

『私は天から降^{くだ}ってきた活けるパンだ。人はこのパンを食べると永遠^{とこしえ}に生きる。私が与えるパンは私の肉だ、私の血肉だ、世の生命^{いのち}のためにこれを与える』。それを聞いたユダヤ人たちの間で論争になりました、『一体この人は自分の肉を切り割^きいて与えるとは何たることだ、そんなことできるもんか』と。イエス言い給う『まことに誠になんじらに告ぐ、人の子

「人の子」とはご自分のことをおっしゃる暗号です、

の肉を喰らわず、私の血を飲まなければ、あなたがたに生命はない。だけど、私の肉を喰らい、私の血を飲む者は永遠の生命をもつんだよ。私は終わりの日にその人を甦^{よみが}えらせる』(ヨハネ6・51～54)

「終わりの日に人は復活する」ということなのです。けれども終わりの日どころではありません。もう喰らった途端に私たちは活き始めます。終わりの日には完成されるだけです。全^{まった}き姿になって誰の目にも明らかに becoming 現われてくるのが「終わりの日」ですけれど、今始まるのです。この時から始まっている。

「それわが肉はまことの食物、わが血はまことの飲物なり、わが肉を喰らい我が血を飲む者は、我に居り、我もまた彼に居る」(ヨハネ6・55～56)

ごはんを食べたら消化され、体の一部になってゆきます。そのように、私という生命のパンを本当に喰らう者、見えないキリスト、霊的存在であるキリストを我々の魂の中に全身でいただく。

「主さま、どうぞ来て下さい、いただきます」

「主さま、いただきましたよ」

と言って、体の中にいただきます時に、イエスは

「そうだ、そうだ、お前の中に居るよ、決して離れないよ」

とおっしゃって下さるのです。

●本物のパン

「ちょうど、私(イエス・キリスト)が神さまから遣わされて、活ける父が私を遣わして下さって、そして私自身は父なる神さまによって永遠の生命をいただいて活きている。神さまが私を活かしていらっしゃるように、今度は私を食べる者、私を受けとる者、その者を私は活かすんだ。我を喰らう者も我によりて活くべし」(ヨハネ6・57)

昔、モーセの時代に、エジプトからイスラエルの民は出て行きました、「十戒」の映画の中にありますように。そして荒野^{あらの}に入って随分苦労しました。その時に、食物がなくて困った時に、モーセは祈りました。そうするとウヅラが飛んできたり、キノコのような物が地



から生えてきたりして、一か月位養ってもらったことがある。それで、「モーセはパンをくれた」ということで大変崇敬^{すうけい}の的になっているわけなのです。歴史的にもモーセは偉かつた。それで問答の中に、

「あの預言者モーセはあんなにすばらしいこととしてくれたけど、イエスさん、あんたは一体何をしてくれるんか」

なんて議論をしている。それに対してイエスはここで、

「天より降ってきたパン、私という本物のパンは、昔先祖たちが、ああしてモーセを通して食べさせていただいたパンとは違う。あのパンを食べた先祖たちはやっぱり死んだではないか。あれは永遠のものではなかった。あれは影に過ぎない。やがて来るべき本体、私という本物、それをあのような歴史的な事実を通して、神さまはあらかじめイスラエルの人たちに語られたに過ぎない。だから、私というパンは先祖たちが喰らってなお死んでしまった、そんなパンじゃない。私というこのパンを食べる者は永遠^{とこしえ}に生きるんだ。」(ヨハネ6・58)

こうおっしゃっている。そこで、先程の60節のところですよ。

● 霊と肉

「弟子たちのうち、多くの者これを聞きて言う、『こは甚^{はなは}だしき言^{ことば}なるかな、誰かよく聴きうべき』」(ヨハネ6・60)

こんなばかばかしい話、聞いていられるものかと、あるいは、こんな理解しがたい話、聞いていられるものか、と言ってブツブツ言い出した。そこでイエスはおっしゃった。

「今言ったことがみんなに躓^{つまず}きになるのか。そしたら私のもと居たところ(天界)、父のみ元に昇って行くのを見たらどうなるのか。活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり」(ヨハネ6・61～63)

「活かすものは霊なり」と、これは幽霊の霊じゃありません。

「肉」というのは、我々の自然的存在です。自然的な人間の存在です。自然界も含めまして、五感の世界です。植物、動物、我々人間を養っているもの、この世の世界も全部「肉」です。我々はその自然の一部です。自然の中で、自然と共に生きているわけです。

けれども、それだけでは本当に生きたことにならない。あなたがたの生命はそんな安っぽいものではないよと。もうひとつ高次元の生命、それが「霊」です。神さまは霊なのです。誰も神さまを見た者はいない。しかし、神さまは霊なる実存者として厳然^{げんぜん}として存在して在^あり給^{たま}う。

そして、我々のこの五感の世界へ、3次元の世界へ働きかけてこられる。それが顕^{あら}われ



た時、我々はびつくりして奇蹟だというわけです。我々の自然法則を破ってこられるから。神さまの方から見れば奇蹟でも何でもない。ご自分の世界を我々の世界の中に、突入させ、切り込んできて、そして何かをなさる。それで私たちは驚き、^{つまず}躓く。信じないわけです。

●み心のままに

神さまは時々そうやって顕われてこられる。キリストのなさっておられるのは、みんな神さまのみ心に従って、み心のままに動いておられるだけなのです。風が吹いているのと一緒にです。台風みたいなものです。静かな静かな日にどこからあの台風は来るのだろうか、正直、不思議でなりません。空気が動いているだけなのですけれど、しかも誰の意志で動いているか分かりません。キリストはみ旨^{むね}のままに動いておられる。だから

「自分は自分の考えではやっていない。私は自分から何もしない。また、何もできない。私は無能者だ。ただ、父が『せよ』とおっしゃることを、させてください
ているだけだ」

と言っておられるのです。

キリストは神さまのことを「父」と呼ばれた。我々は誰も父などと呼べません。神さまを見た者はいない。神さまを体で感じた人もいない。けれども、このイエスというお方の中には、不思議なことに神さまの霊が宿ったのです。それから神さまとの間に交流が始まった。だから「父よ」と呼ばれるようになったのです。それはどの福音書にもそのことを書いております。

たとえば、ルカ伝3章15節、キリストの前に洗礼のヨハネという偉大なる人物が遣わされました。それでヨハネは偉大なものですから、みんなはこの人こそメシヤかと思って待っていた。ところがヨハネは、

「私はメシヤではない。私の後^{あと}においでになるお方がいらっしゃる。そのお方がメシヤだ」

と言っている。

「私は水でああなたがたに洗礼を施しているけれども、私の後においでになるお方は——私がその方の鞋^{くつ}の紐を解く値打ちがないほど私はみずぼらしい存在だ——

ぞうり取りにもしてもらえない位の者だと。

私の後にいらっしゃるお方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを施し給

う」(ルカ3・15、16)

そういうことを言いました。



●水のバプテスマ(ルカ伝)

ヨハネは言った、

「そういうすばらしいメシヤがいらつしやるから、お前たちは心を入れ替えて、
そして備えをせよ」

と、人々の罪を責めて叱責した。そして人々は続々とヨハネのところにやって来て、悔い改めて水のバプテスマを受けた。しかもヨハネは、

「すごい審判の火が臨む」

と言った。清らかでなければ、神さまに逆らう生活をしていたら、たちまち焼き尽くされてしまうと、審判の火のことを言いました。みんなはびくりして洗礼を受けていた。そうすると、キリストもおおいでになって、ヨハネから洗礼を受けられた。それが21節です。

「民みなバプテスマを受けし時、イエスもバプテスマを受けて祈り居給えば、

天ひらけ、聖霊、形をなして鳩のごとくその上に降り、かつ天より声あり、

いわく『なんじは我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ』(ルカ3・21、22)

何千人の人がそこでバプテスマを受けたか分かりません。けれども、誰一人こんなことは起こらなかった。イエスがヨハネから水の洗礼を受けられた。その頃の洗礼は川の中へぎぶんと全身をつけます。古い自分を葬るわけです。そして新しく生まれ変わって起き上がってくるわけですね。そういうことを表しています。キリストもそのようになされた。そして祈っておられた。そうすると霊界の天が開け、聖霊が鳩のような姿となって、キリストに臨んだ。

これを見たのはヨハネです。他の人には見えません。大体、霊界の事象というのは普通の人には見えないのです。特別に目を開かれた人だけが見える。たとえば、今ここにキリストがいらつしやるとしますね、そしてある人の目が開かれたら、キリストのみ姿を見て本当に平伏しますよ。ところが、他の人はキョトンとしているでしょう。そういうものです。ここではヨハネが見た。このことがあつてからイエスは伝道を始められたのです。

●水のバプテスマ(マタイ伝)

マタイ伝で同じところを見てみましょう。こちらの方が詳しく書いています。ヨハネが人々を叱責するくだりが3章4節から出てきます。ヨハネという人はラクダの毛織衣をまとって、腰に皮の帯をしめ、蝗と野蜜を食べていた、不思議な人物です。荒法師みたいな生活をしていた。

「キリストというお方がおいでになるから、お前たち悔い改めろ」

と言っていたわけです。それから3章の13節、14節、

「ここにイエス、ヨハネにバプテスマを受けようとして、ガリラヤよりヨルダン川の方にやって来られた。ヨハネは驚きまして、『私こそがあなた様からバ



プテスマをいただかなければなりませんのに、あなたが逆に私からバプテスマをお受けになさろうとする、そんなこと逆です』罪なきイエスさまが、罪の悔い改めをなさることなど、いらないことです。けれども、イエスは言われた『今は許せ、われらかく正しき事をことごとく為^なす^しては、当然なり』。そしてヨハネはそれを許しました。イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御^み霊^{たま}の、鳩のごとく降りて己^{おの}が上^うにきたるをイエスは見給う。また天より声あり、いわく『これは我が愛^{いと}しむ^く子、わが悦ぶ者なり』(マタイ3・15、17)

それから、4章に入ってイエスは御霊に導かれて、悪魔に試^{こし}み^うまれるために、荒野に追いやられる。イエスは神さまの聖霊を受けて、神さまと交流できるようになりました。けれども、それだけでは伝道、人を救^{すく}うみ^み業^{わざ}に出て行くには不十分であり、悪魔と戦わなければならぬわけです。

● 霊界の存在

神さまの霊がありますでしょ、それに対して逆らう霊がいる。この二つが熾^し烈^{れつ}な戦いをやっているわけです。神さまの霊にすっぽり包まれて、それに導かれている人は正しい生活をしていきます。清らかな、光輝く生活をします。

けれども、暗い変な霊にとりつかれたら、どんなにもがいてもそこから逃^にげ^がられないのです。本当に恐ろしいことです。霊界は厳然として存在します。たとえば人が死にましょ、そうしますと、神さまの霊、天使たち、神さまにお仕えする霊たちと、それから暗黒の霊、その魔軍、子分たちが寄つて来て、それで「俺のところへ来い、俺のところへ来い」と新人のぶん取り合戦をするそうですよ。

それをちゃんと示された方がいらつしゃって、インドのサンダーシングという、すばらしい聖者でした。本当にキリストに何度もお目にかかって問答している方です。日本にも1910年頃にやって来ました。その人が霊界のことを書いてくれている。死後の世界がどうであるかという、それを読んでなるほどと思いました。

人が死にましょ、したら天使たち、神の僕^{しもべ}たる霊と、それから悪魔の霊がワツと寄つて来る。そして「おいで、おいで」と言うのだそうです。その時に、日頃から神さまと交わりをもっている霊は、

「あつ、こつだ、こつだ」

と言って、ずっとそちらへ導かれて行く。ところが、日頃からそういうものと何の交わりももっていなかった人は、いくら親切な天使たちがやって来ても、「私とはかわりありません」と言^こひ^はって拒^こむ^はそうですよ。まあ拒むけれども天使たちは親切に、

「心配しないでいいんだ、おいでなさい」



となだめる。当初はあまりにまぶしくて行けない。しかし、年月が経つと霊が光に変化していくそうです。ちょうど地下の穴ぐらで生活していて急にお日様のところに出ると目が眩^{くら}むでしょ。それと同じだという。キリストはまばゆい光の中にいらつしやる。このまばゆい光をスツと受けとれるのは、こちらがそれだけ光になっていないと受けとれない。そして、みがかれていない霊は段々みがかれ、成長して光の方へ導かれて行くという。

●霊界の王者キリスト

ところが、人殺しだとか、詐欺^{さぎ}だとかさんざん悪いことをした人は——人間というのは日頃そういう霊と交わっているいろいろな罪を犯している——そうしますと、死後、暗黒の霊がやって来る。天使もやって来る。ところが自分には天使たちは関係ない、暗黒の霊が来たら、「あつこれぞ私のゆくところだ」と言つて、そこへすつと行くそうですよ。

だから、サンダーシングは言っている。

「神さまは決して審^{さば}かれない。お前は地獄だ、お前は天国だとおつしやらない。
自^みら^ずが自分にもつともふさわしい霊の場所を選んで行く」

と言うのです。だから、日頃から暗いところと交流して生活をしている人は死んでからもそういうところへ行くという。しかし、そこには何の喜びも平安もありません。苦しみだけがありません。苦しみがありながら、そこから出られない、無間地獄^{むげんじごく}ですね。ところが、そうでない霊は段々^{きよ}潔められて高いところへ昇つて行くわけです。

キリストは霊界の王者でいらつしやる。キリストは人としてお生まれになった。何もキリストは天からふつてわいたのではない。特別な生まれ方、マリヤさんの中に特別な生まれ方をなさつた。その自覚をお持ちになつて人として育てられました。とにかく、キリストというお方は12才の時のお話が出てきます。大人を相手に霊界のことを問答したけれども負けなかったという。しばしばお父さんお母さんがこの子に面喰^{めんく}らつた、理解できなくて困つたということが書かれています。

もし、神童^{しんどう}というものがあるなら、正に神童であつた。神童というのは神さまと交流があるという意味で神童ですが、決して変人ではなかったのです。人と神に愛されて、すすくと成長されたと書いてあります。そして他は書いておりませんが、いつも祈つておられた。きつと祈つておられた。

そして、ヨハネがやがて殉教します。それから伝道に立たれるわけです。その前に決定的なのは、ヨルダン川でバプテスマを受けられた時に、霊界の天がひらけ、はつきりと聖霊を受けられたことです。

●ひれふし

イエス・キリストというお方の中に、受信基地ができたわけです。そうすると天界から



神さまのみ声が発信されてきましたよ。それを全部ここでキャッチなさるわけですね。我々は残念ながらその受信基地ができていない。受信基地ができればスツと受けとれる。イエスはするようにして基地ができましたから、それでいつも交信なさり、そして神さまのことを「父よ」と呼ばれました。

そして、イエスがすばらしかったのは、こんなにすばらしい受信基地ができ、神さまのみ旨がドンドン流れてくる、神さまの力がドンドン流れてくる。それでいていつも神さまの前に平伏^{ひれふ}します。これが普通の人にはできないのです。

人はちよつと才能があつたら威張^{いば}るでしよ、「俺はできる」といつて偉そうにするでしよ。けれども、その才能、努力できる力、健康、これはみんな天からいただいたものですよ。大きな顔する必要はない。でも人間はすぐ威張りたがるでしよ、そして自分よりダメな奴をすぐあいつはバカだといつて見下げたりします。それがやはり間違いの元です。

イエスというお方がすばらしかったのは、いつも平伏します。神さまの前に本当に平伏しておられるわけです。これが無くなつたら、つまり、自分が何者かだという、自分を何者かすると悪霊が来ます。神さまだけを一切とし、自分の方はナッシング(無)とする、この姿ならいいのです。水は低きに流れるように、いいものがドンドン流れてくる。

ところが、流れてきていただいたのに、自分が偉くなつたと思つて、自分が高くなりますと、そこへやって来るのは悪霊の霊です。だから、恐ろしいですよ。悪魔だつて奇蹟をやりますしね、霊の力でちよつとした奇蹟くらいやつてみせます。

ですから、どんな現象が起こるかということではないのです。その魂が本当に神さまの前に平伏して、いつも祈っていることです。

「神さま！ わたしではありません、あなたが全てです」と。

●さわやかなイエス

ある時、青年がイエスのところにやってきて、

「善^よき先生、どうしたら永遠^{いのち}の生命をいただけるんでしょうか。私は昔から一生懸命にモーセの律法、神さまの教えを守ってきました。けれども、心に安らぎがありません。どうしたら本当の平安、永遠の生命をいただけるんでしょうか」

と言つて、真面目にやつて来た(マタイ19・16、マルコ10・17)。「善^よき先生」と言つてやつて来たら、

「なぜ、私のことを善^よきと言うか、善^よき方は神さまだけだ。私は善^よき者でも何でもないよ、あなたと同じ人間だ。ただ、私の中には神さまのみ旨^{むね}が流れてくる、そのみ旨に従つて歩いていただけだ、み心のままに生きているだけだ」



(マルコ10・18、ヨハネ5・19)

だから、イエスは、

「私を見た者は父を見たんだよ」(ヨハネ14・9)

とおっしゃったのです。ご自分が空^{から}つぽでしよ、私心がないでしょ。ちょうど美しい湖に美しい風景が映りますように、イエスの心は澄みきっていますから、本物の光が全部ここに映るわけです。イエスの心の中はいつもさわやかですから、

「幸福^{さいわい}なるかな心の清き者、その人は神を見る」(マタイ5・8)

とおっしゃった。ちょうど台風が通り過ぎますと、空気が澄みきっていますように、キリストはいつも心が純一でいらした。「純一」ということは神さまのことだけを考えておられた。

●よい交わり

我々だってそうですよ、変なものを見ていると変なことになりますし、いいものを見ていると、こちらが良くなつていきますしね。問題は何に向かうかです。暗い方へ向かうと心が暗くなります。けれども、明るい光の方へ心に向けてゆきますと、明るくなつてゆきます。だから、お日様に向かつていれば、体が暖められ清められてゆきます。そうでしょう。そのように私たちは日頃から、いいお友だちに接する、いい心の先生方に接する、いい人たちに接する。そうすると心が安らかになつてゆきます。

だけど、憎しみだとか、争いだとか、嫉^{ねた}みだとか、陰口、悪口、そんなのが渦^{うず}巻いているところに身を置いてごらんさい。そうしたら心に平安はありませんよね。

姿、形ではみんな同じかもしれませんが、皮を剥^はいてみたらどんなに邪悪^{じゃあく}であるか。こちらはどんなに清らかであるか。だからいい交わりをしないとね。それは書物でも一緒です。悪い書物、それは人間の品性を悪くしますから。

大分脱線しましたが、イエスというお方は、神さまといつも交流しておられました。だから我々と同じような人なのですが、この方は天界と交流がありました。ここにいつも神の霊が充満しておられました。そして神さまの霊はすごいですから。神さまは何でもなされるお方でしょ。旧約聖書の創世記の一番初めに、

「神が『光あれ』といわれたら、光があつた」(創世記1・3)

と書いてあります。神さまが意志なさることは成る。神の言^{ことば}はそれだけ力があります。神の言は必ず成つていく。神さまの言というのは、神さまの全人格の表われですから。

「光あれ」

とおっしゃれば、そこに光があつた。また、病^やめる人に向かつて

「癒^いえよ」

とおっしゃれば、そこで病が癒えてしまう。本当にそう書いてありますもの。



●カナでの第二のしるし

すごいですよ、本当に驚きなのです。またヨハネ伝へ戻りましょう。イエスは二つの奇蹟をなさった。初めはカナの婚姻、結婚式へ行つて、葡萄酒がなくなつてしまつて、新郎の家族の者が困りました時に、水を葡萄酒に変えて栄光を顕わされたのがひとつです(ヨハネ伝2章)。二番目がこれなのです。4章46節からみましょう。

「イエスまたガリラヤのカナに往き給う、ここは先に水を葡萄酒になし給ひし処なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病みいたれば、イエス、ユダヤ(南の方)よりガリラヤの北の方へ上つて来られるのを、伝え聞きまして、み許にゆきて、カペナウムに下り、どうぞ子供を癒して下さいとお願いした。子供は死ぬばかりなりしなり。ここにイエス言い給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』」

お前たちは素直に信じない、何か奇蹟を見ないとなかなか信じないんだねと。

近臣言う『主よ、わが子の死なぬうちに下り給え』

どうぞ一刻も早く来て下さい、あなたが来て下さらないと、子供は危ない。そうすると、

イエス言い給う『帰れ、汝の子は生くるなり』

この近臣は切羽詰まっていますから、その言葉を信じたんです。「帰れ、汝の子は生くるなり」を信じて帰りました。

そうすると途中で、帰り道で自分の家から使いがやって来た。そして『お子さんは生きられました、治りました』と言って、喜びいさんで伝令がやって来た。『いつだね』と聞いてみたら、『昨日の第七時に熱去れり』という。

今の午後一時頃、ちょうどイエスが「帰れ」と言つた瞬間なんです。その瞬間に遠く離れた息子が治っているというわけなんです。この近臣のお父さんは「お前の子は生きるぞ」と聞いたその時だと、それですっかりキリストを信じたんですね、

父その時の、イエスが『なんじの子は生くるなり』と言い給ひし時と同じきを知り、己も家の者も皆信じたり。これはイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて為し給える第二の徴なり」(ヨハネ4・46〜54)

●ベテスダ池でのいやし

それから5章にゆきますと、ユダヤに戻られ、エルサレムに行かれます。エルサレムの羊門のほとりに、ベテスダという池がある。「遣わされた者」という名前の池です。そこにたくさんのお病人がゾロゾロ周りにたむろしている。時々水が動くと、病人は我先に水の中へ入ろうとする。なぜかという、「天使が降りてきて水を動かすと、その時に一番に池の中に飛び込んだ人はどんな病気でも治される」ということなのです。カトリックの方でルルドの奇蹟がありますね、水を飲んだら病気が治るとか、そこに天使が降りて来たりす



るとか、今でもあるみたいですけども。そういう霊験あらたかな池だということだ病人がたくさんいる。ところが、ここに出てきますのは38年間、病に悩む人がいまして、イエスがちょうど通りかかられ、声を掛けられたわけです。

『君の病は長いねえ、治りたいだろうね、あなたは治して欲しいかね』そして、その病人は答えました、『水が動くとき、誰も池の中へ入れてくれないんです。我先にと人は中へ入ってしまいます。いつも私はとり残されます。はじめなんでもございます。するとイエスはおっしゃった、『起きよ、床を取
りあげて歩め』

これまた乱暴でしょ。

この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり」(ヨハネ5・6～9)

瞬間に治ってしまった。それを見ていた人たちが——その日は安息日であって、何も仕事をしてはいけない日だと宗教的にはそうなっている——それでケチをつけ出した。ユダヤ人はイエスを責めました。そこで17節、

「イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』(ヨハネ5・17)

何の働きかというと、人を活かす働きです。だから私も働くのだと。

●いのちを与える神さま

そこでユダヤ人はイエスを殺そうと思った。それは二つの理由からです。ひとつは

「安息日を破っている宗教的犯罪人である」

こと、もうひとつは

「神さまのことを『父よ』と親しげに呼ばれ、神さまを冒瀆している」

という、この二つです。それで

「イエスを殺せ」

と。本当の理由は嫉みなのですから。イエスのような方が出できたら自分たちの伝統的な宗教が成り立ちませんので。イエスは新人ですよ、素人新人イエスです。これでは商売あがったりというわけで、イエスを殺そうとした。

「イエスは答えられた、『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは、自ら何事をもなし得ず、父のなし給うことは子もまた同じくならずなり。』

私はお父さんのまねをしているだけだよ。お父さんがせよとおっしゃるその通りにしているだけだ。それで何をしたらいいか、神さまは自分にちゃんと示して下さいと。

父は子を愛して、そのなす所をことごとく子に示し給う。また更に大なる業を示し給う。あなたがたが不思議だなあと思しむ、そのためだよ。父の死に



し者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり」(ヨハネ5・19、21)

神さまは生命いのちを与える神さまなのです。神さまは人間を不幸にしようとか、審さばこうとか、苦しめようとか、そんなことは思っておられないのです。全部活かそう、活かそうとなさっている。人間はなぜ苦しむか、不幸になるか。多くの原因は悪の霊の作用です。あるいは、ご先祖が罪を犯してそのタタリかもしれません。我々はよく分かりません。けれども、神さまは決して人を苦しみの中に放り込もうとか、そんなことは思っていない。だから、神さまは生命を与える神さまです。愛の神さまです。生命いのちづける神さまです。だから、

「子(イエス)もまた己が欲する者を活かすなり」という。

●イエスしかできないみわざ

「父は誰をも審さばき給わず、審判をさえみな子に委ゆだね給えり。これすべての人が父を敬うやまうごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は、之を遣つかわし給いし父をも敬わぬなり」(ヨハネ5・22、23)

だからこのナザレのイエス、人の姿をとっていらつしやるこのイエス、その中に実は神さまの霊が宿っているのです。それで、

「我なんじを悦ぶ」

というみ声がルカ伝3章22節にあつたでしょ。

「お前こそ私が待っていた私の子だよ。お前を通して私の業わざがこの地に展開していくんだ」

というみ声がありました。お前しかできない業とは何かといいますと、罪の赦ゆるしということなんです。人間は、自分で自分の罪はどうしようもありません。しかも、単なる赦しだけではありません。贖罪あがなひと申しまして、罪を消して下さる、そのみ業。人の中に巢食う罪を根こそぎ取り去る、そのみ業です。

これは神の霊の宿ったイエスというお方しかできない。そのことを段々とご自分で自覚なさるわけです。最後にイエスは十字架に懸かられました。

神の子がどうして十字架にかかるのか。

「お前、神の子ならば十字架から降りてみる、飛び降りてみる。日頃、神の子だなんて言っ、神の業をしておりながら、今、十字架につけられて、手も足も出ないじゃないか」

といって罵ののされたわけです(マタイ伝27章、ルカ伝23章)。

でも、イエスは黙って十字架に懸かり、そして死なれた。



●愛の生涯のきわみ

その前にイエスは祈られた。ゲッセマネの祈りといいまして、唯ひとり深く祈られた。月明かりの中で、イエスは地べたに平伏して、

「父よ、み心ならば、この苦い酒杯にがさかずきをとりのけて下さい」(マタイ26・39)

「苦い酒杯」というのは「十字架に懸かる」ということです。十字架に懸かるということは、イエスは「罪人になる」ということ。

イエスというお方は神さまのみ心だけを求め、己が我欲なんてなかった。イエスのなさったことといったら、病の人を癒すことだとか、その他、神さまの望み給うたことをひたすら神の僕として、神に仕える存在として、神さまのみ心をなさった。その生涯はみ心に生き抜いた愛の生涯です。人を活かす愛の生涯を貫いた。イエスは神さまのみ心を「はい」「はい」と言って聞いてゆかれたわけです。まともな家すらありませんでした。

「人の子は枕する所なし」(マタイ8・20)

と言われた。ある意味ではさすらいのような生涯です。しかし、向かっていたのはいつも神さまのみ心です。

神さまのみ心は愛ですけれども、この地には先にも言いましたように反対の霊が、悪しき霊がいますから、それが人をつかまえて、人はなかなか解き放たれない。なかなか罪というものがなくならない。深く罪が巣食っています。人の霊は悪魔にとらえられ、解放は容易ではない。

そこで、神さまは僕である愛するイエスに、

「十字架に懸かれ。あの十字架でお前は人の罪を背負え」

と。十字架というのは、一番重い罪を犯した人が処せられる極刑です。今でしたら絞首刑ということでしょう。昔は十字架、はりつけ、釘づけです。この十字架につけられる人は詛われたる人、天の詛いを一身に受ける。詛いの十字架に神の子イエスがつけられて、

「お前は罪人に代われ」

というわけです。

●十字架への道

我々罪人はみんな大なり小なり十字架に値するような存在です。本当のところを言います、「わたしは正しい」なんて、神さまの前に出て胸を張れる人なんて一人もいませんよ。人間の正しきなんか知れています。そういう人の罪を、他ならぬイエスに、

「お前は背負え」

とおっしゃった。

それまでユダヤ人はいつも罪を犯しては、大祭司が一年に一回、神さまの神殿に入って行った。そこへどのようにして入って行ったのかというと、一番すばらしい羊——1才の



小羊です——一番きれいなのを殺して、その血を携えて、その血を外にいる民にふりかけます。それから自分にふりかけます。これが潔めなのです。そういう儀式を毎年繰り返していたのです。

それで、十字架は何を躓わしていたかというところ、キリストというお方が、イエスというお方が、あの昔、大祭司が屠つては捧げていたその羊の姿になられた。その小羊の血が人の罪を潔めるのです。それで、ゲッセマネで祈られた。

「神さま！ あなたは全能の神さまではありませんか。なぜ私が十字架に懸からなければ、人の罪は赦されませんか。あなたが全知全能ならば、人の罪をたちどころに消して下さっていいではありませんか。私はあなたから離れたことがありません。私はいつもあなたを『お父さん』と呼んでいました。あなたは『子よ』と呼んで下さった。どうして父と子が引き裂かれて、それも呪いの木に懸けられて地獄へ突き落とされる、そんなことがありましようか。それだけはこらえて下さい」

と苦しまれて祈られたのがゲッセマネの祈りなのです。そのイエスの祈りの時に、額から落ちる汗は血の滴のようであつたと書いています。そして、天使が現われてイエスを力づけたと。

●ゲッセマネの祈りと十字架

イエスというお方は決して超人でもありませんし、巨人でもありません。普通の、人らしい人なのです。人の弱さを思いやることのできるお方、血も涙もあるお方です。どんな弱い人の心も、苦しんでいる人の心も、手に取るように分かる。そういうお方なのです。そういうお方がゲッセマネで苦しんで祈られた。三度祈られた。

「父よ、できることならこの酒杯をとりかけて下さい。しかし、あなたのみ心のままになさって下さい。私の心ではありません、あなたのみ心になりますように」(マタイ26・39、42)

しかし、三度とも

「お前は十字架に懸かれ」

という答えしか返ってこなかった。

そこでイエスは決然として立ち上がって歩き出されたら、ユダがやって来た。祭司長などユダヤの宗教指導者たちがつかわした多くの群衆を連れて、イエスを逮捕しようとして来た。そこでイエスはみずからご自分の身柄を渡された。

そして、ピラトの裁判によって十字架につけられたわけです。ピラトは

「この人には何の罪もない」

と言いました。けれども群衆は興奮していますから、バラバという強盗殺人犯を赦してや



れと。ピラトは

「お前たちの祭の時は、どんな重罪人でも一人は赦してやるではないか、そしたらこのイエスを赦したらどうか」

と言ったのですね。ところが、

「いやイエスはだめだ、あの強盗殺人犯のバラバを赦せ」

と答えた。そこでピラトは

「じゃあ、わしは知らんよ」

と言った。そうしたら、

「俺たちが責任をもつ、イエスを十字架につけろ、十字架につけろ」

と、騒ぎだした。ローマの総督(裁判官)であつたピラトは、暴動になると自分の地位が危なくなるので、やむなく「じゃあ、わしはもう知らんよ」と言つて、イエスを十字架につけるのを許した。そういうことが福音書の後半部に詳しく出てきます。

●十字架と私

この十字架は我々の負うべき審判^{さばり}、我々が審か^{さば}れて当然の審判を、イエスはあの小羊となつて十字架に審かれていらつしやるわけです。

私などそのことが全然分かりませんでした。確かに教会には十字架が立っていたり、クリスチャンの友だちもいました。けれども、十字架が私とそんな深いかわりをもつていたことは、本当に知らなかった。

キリスト教をぼろくそに言つたり、神さまが有るとか無いとか論じたり、それはご自由です。けれども、そんなことをしても何も自分にかかわりないですね。私たちがイエスというお方に出会ふのは、突き詰めればここ(十字架)なのです。イエスは、

「私はお前を愛している。私はお前に生命^{いのち}を与えたい。だけど、生命を与えるには、まず旧いお前が葬^{ほうむ}られなければならない。旧い我^{われ}が生きているままに、新しい生命を注いでも、拒絶反応を起こしてしまつてだめなんだよ」

と。旧い我が完全に葬り去られて、内的に全く新しくされて、その時にイエスの永遠の生命が与えられる。そうしたら、この永遠の生命は絶対に間違いない。その土台が必要なのだと。

本当の建物を建てようとしたら、基礎からやり直さなければなりませんね。基礎が腐っている所へいくらいい物を建ててもだめになります。それと同じなのです。私たちの旧き我、これが先程の「肉」なのです。

「肉は何の役にも立たない」

というわけは、肉というのはいっぺん滅ぼされて、そして新しく造り変えられなければどうにもなりません。それが先程の「肉」ということなのです。



●死からいのちへ

今のヨハネ伝をもう少し読んでいきましょう。5章24節から、

「誠にまことに汝らに告ぐ、わが言^{ことば}をききて我を遣わし給いし者を信ずる人は

神さまを信じる人は、

永遠^{とこしえいのち}の生命をもち、かつ審判^{さばき}にいたらず、すでに死より生命に移れるなり」(ヨ

ハネ5・24)

その人はもう死なないよ、生命だよと、イエスは先どりしてこんなことをおっしゃっているのです。

「誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、死人が神の子の声を聞く時が来るんだ

よ、いやもう来ているよ、そして聞く人は活きるんだよ」(ヨハネ5・25)

理屈ではないですね。

「帰れ、お前の息子は生きるぞ」(ヨハネ4・50)

とおっしゃった一言で子供は重い病氣から生き返ったでしょ。それくらいキリストの言葉、神さまの言葉は權威があるわけです。38年病^{やま}いで苦しんでいた人に、

「起きよ、床^{とこ}を取りあげて歩め」(ヨハネ5・8)

と、それで彼はガツと起き上ったわけですね。そして健やかになった。

そういう權威ある言葉を発するお方、その方のみ声を魂で聞くのです。この聖書を目で読みながら、魂の耳で聞くのです。聞いたらただちにそれを自分の中にいただいてしまうわけです。

「はいっ、この言葉、いただきました」

といって、いただいてしまう。そうしますと、もうその人に生命がやってくる。

だから我々は、イエスのことを知らなかったら死人のようなものですよ。死んでから本当の死人になるのか知りませんが、生きながら実は何の喜びもなく、生命もなく、不安の中に、苦しみの中に生きているのは、半分死んでいるようなものでしょ。

●境遇を突破する力

お金のある人はお金のある人で、また地獄です。相続税をどうしよう、財産分けで子供たちがケンカしたらどうしよう、ドロボウが来たらどうしよう、と心配ばかりしていますし、体の病んでいる人は、ますます先々のことを心配して、ひとつ治れば次の病氣が出てきますしね。お天気みたいなもので、雲が去ったらまた次が出てくる。

そんなことで、誠にこの人生は、どんな境遇^{きようぐう}の人でも悩みは尽きません。まわりからあの人は羨ましい^{うらや}いと思われていても、当人にとったらちっともそうでない。徳川家康ですか、

「人の一生は重荷を負いて遠き道を行くが如し」



と言ったそうですね、誰にでもそうだと。しかし、その境遇をいくら変えましてもだめなのです。大事なのは坂道を登っていても、その坂道をものともせずに登りゆく推進力を与えてくれるものです。死んでも死なない生命、どんなものでも突破する力、そういう力が来たら坂道はどうということないですね。

私はイエスが水の上を歩いて来られたことを信じる。なぜかという、神さまの力がグンと支える。重力以上の力が天界から来て支える。それで歩いてゆかれたと思うのです。

イエスは祈られたら変貌する方だと思います。本当に祈り切っておられたら、イエスの体は後光ごこうを発して、肉体が肉体でなくなるような変貌をなさる方だと思います。それだけの方だと思っっているのです。だからその時はもう重力の法則が働かなくなつて、下へ落ちる重力、引力よりも上から引き上げる力の方が強い。それで空中遊泳だつてできるはずでしょ。そういうことがイエスにおいて起こつたのだと思いますね。

これは私の想像にすぎませんが、そういうすごい次元の生命がイエスの中に来ていた。だから、言葉を発すればすぐに癒いえてしまう。ラザロなど墓に葬られて四日も経つて臭くなりかけていた。そのラザロに向かつて、

「ラザロよ、出て来い！」(ヨハネ11・43)

と言われたら、ラザロは白い包帯を巻いたまま出て来たというわけですからね。そして人々は驚いたとヨハネ伝の11章に出てきます。

●人間の本当の生き方

これ全部、先程言いました徴しるしなのです。ラザロも後にはやはり死にましたよ。けれども、イエスはそのようにしてある時は死人を甦よみがえらせ、ある時は病人を癒いされている。節目、節目でなさっている。それを通してイエスというお方の中に宿っている神さまの霊の次元がどんなにすごいのか、しかもそれはどんなに愛であるか、生命であるかと、実はそれを顕あらわしているのです。

だから奇蹟に驚いたり、「奇蹟ももう一度」というのではなく、その本体、イエスの中に宿っている生命、それを

「いただきますー！」

と仰おつていただいでしてしまうのが、一番いいのです。そうしましたら、我々がどんな人生をたどりまして、そこに神さまの御旨みむねが流れてきます。神さまは我々一人ひとりを用的ようにたくて仕方がない。ご自分のみ心のままにです。それで神さまのみ心に委ゆたねて生きるのが、一番確実で、間違いのない、人間の生き方なのです。

それに気がつくのが80才では惜しいでしょ。やはり早い時に気がついて、早い時に気づいて歩んだ人が、「私はよかったです」ということを言えば、あとの人は安心してついて来れるではありませんか。私はそう思っているのです。



キリストというお方は見えない神さまを顕して下さった。

「私を見た者は父を見たんだ」(ヨハネ14・9)

とおっしゃり、私はそれを信じました。本当に信じて歩んで来て、本当によかったと思っています。それで、私自身の中に本当に何か不思議な力が働くのです。何かなさろうとなさっているのだと思います。そして私を通していろいろな人が、絶望の中から希望によみがえったりとか、いろいろ変化を起こしてゆかれるんですね。これ全部私ではありません。私を通してイエスさまが何かをなさろうとしているのだなあと思っているのです。私は普通の人間に過ぎませんけれども、このイエスというお方が十字架で私と結び付いた。

●十字架のみ声

「私は、イエスさま、あなたによって本当に罪を、根源的な罪を赦していただきました。私は罪人でありましたけれど、今や罪人ではありません。罪は全部あなたが片付けて下さいました。それだけでなく、あなたはちょうど父なる神から受けられたと同じ霊を、今度はこの私に注いで下さる。私は十字架で根源的に罪なき者とされました」

と。

「われ主と共に十字架せられたり」(ガラテヤ2・20)

とあるように、

「十字架でもうお前と一緒に背負ったんだよ」

とおっしゃって下さった。本当なんです。

「もうお前のことは私が引き受けた。私にまかせなさい。私とお前とは一緒になってアマルガム(融合したもの、合金)だ。もう融合するんだ」

と。キリストの力はすごいですから、私がどんなであろうと、そんなことを問題になさらない。すうつと浸透してこられる、私に生命を下さる。そういうように福音書は生命を与える書なのです。

「墓におる者がみんな神の子の声を聞いて出て来る時がくる」(ヨハネ5・28)

「善を行った者は生命に甦えり、悪を行った者は審判に甦える」(ヨハネ5・29)

という。そして30節、

「我みずから何事もなし能^{あた}わず、ただ聞くままに審くなり、わが審判は正し、それは我が意^{こころ}を求めずして、我を遣^{つか}わし給いし者のみ意を求むるによる」(ヨハネ5・30)

と書いてありますね。そして36節に、

「父の我にあたえて成し遂げしめ給う業^{わざ}、すなわち、我がおこなう業は、父が私をお遣わしになった証拠だ」(ヨハネ5・36)



とおっしゃった。

●主イエスさまへの叫び

「汝らは未だその御声^{みこえ}を聞きし事なく、その御形^{みかたち}を見し事なし」(ヨハネ 5・37)

誰も神さまを見た者はありません。それで、

「永遠の生命がほしいと思つていろいろ旧約聖書を調べているではないか。しかし実は旧約聖書は私のことを証言している。だから永遠の生命を得ようと思つたら、私のところへ来なければならない。私を受けとらなければならない、私を食べ、私を飲まなければならない。それをしないで、自分勝手に聖書の中に生命を捜しても、それは見当ちがいだよ」

とおっしゃっている。

それから、先程の6章へ続いているわけです。もう一度6章の33節から読んでみます。

『神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり』。彼等いう『主よ、そのパンを常に与えよ』。イエス言い給う『わたしこそが生命のパンだよ。私のところにきたる者は決して飢^うえない。私を信ずる者は決して渴^{かわ}かない。でも、あなたがた(そこに居合わせた人たち)は私を見てもなお信じない。しかし、神さまが私に与えて下さる子供たち、それは私のところにやつて来る。父の我に賜^{たま}う者は皆われに來^{きた}らん、我にきたる者は我これを退^{しりぞ}けず』(ヨハネ 6・33〜37)

そうなんです、私たちが「イエスさま!」と本当に心の中から、心の底から

「イエスさま! 主イエスさま!」

と叫ぶんです。必ずその叫び声は通じていますから。本当なんです。遠い遠いところにいるらっしゃるんじゃない。もうすぐそばに、今こうしてお話しているここに、霊のキリストはいらして下さっている。太陽の光はあんなに遠いところからでも我々のところに届くではありませんか。朝日が昇れば、光はすうつと来るではありませんか。

●新生

ラジオ無線だとか、いろいろな放射線が宇宙の空間を流れているわけですよ。だからスィッチを入れればラジオが聞けますね。それは電波が来ているからでしょ。

神さまは霊的存在です。神さまの霊はこの我々の存在界^{おの}を覆っているんです。だから、こちらが波長を合わせれば、チャンネルを合わせれば、スツと来て下さる。

「主イエスさま! 主イエス・キリストさま! 助けて下さい」

と、イエス・キリストの名前を呼ぶことです。名前を呼べば来て下さる。



その時、サタン(悪霊)が、

「お前は、イエスさまなんか呼んだつてだめだぞ。お前は、汚いじゃないか、けがれているじゃないか。お前はイエスさまを呼ぶような値うちがあるのか」

とか、さんざん否定する声が聞こえますよ。その時に、

「サタンよ退け、イエス・キリストは十字架で私の罪を全部^{きよ}潔めてくださった」

と。そのことを信じて下さい。自分に、過去にどんな悪いくせがあらうと、過去にどんな罪を犯そうと、親に反逆しようと、友だちにひどいことをしようと。それはお詫びしないといけません、神さまにね。

「自分は本当に申し訳ない存在でした。あなたのご愛も知らず、本当にあなたという方も知らないで、我がものの顔にこの世の中を歩き廻っております。本当に申し訳ありません。あなたのような本当に素晴らしい方がいらつしやることを、今晩初めて聞きました。きょうから生まれ変わつて新しい生活をしたいです、イエスさま、力を下さい。私は自分の意志が弱くて自分ではできません。自分は三日坊主どころか、二日坊主でだめなんです。でも、イエスさま、あなたはどんな病気でもお癒しになったお方です。死んでいる人間だつて一言のもとに甦えられた力あるお方です。こんな私を、人間一匹をつくり変えるくらいおできになりますね」

と。イエスさまは、
「信ずる者にはどんなことでもできる」
とおつしやつた。

●あふれて止まない霊的生命

キリストは本当に私を愛して、私の罪を背負つてここ(十字架)で苦しんで下さった。そして、引き換えに

「生命をやろう、パンをやろう」

といつてパンを裂かれたでしょ。パンが裂かれているのは、キリストのみ体が裂かれている姿なのです。そして、キリストをいただく者が何千人であらうと、何万人であらうと、なお余りて籠^{かご}に満つるほどに、キリストの霊的生命は溢^{あふ}れて止まないのです。そういうすばらしい霊的な人格であり、実在者、それが霊なるイエス・キリストなのです。

十字架で死なれたけれど、墓に葬られたけれども、三日目の朝、墓は空っぽでした。すばらしい輝く霊体となつて復活して来られました。ローマの兵隊が番をしていても、兵隊は目がくらんで、そんな問題ではありません。イエスは神々しい^{こゝろじょう}霊の体をもつて現われて下さった。弟子たちの何人にも現われた。

それで、弟子たちは立ち上つたのですよ。自分たちの先生はもうだめだと思った。そしたら、イエスはそういうすばらしい生命に現われて下さった。変貌して下さった。罪の処置を済



まして、そして現われて下さった。それから弟子たちは伝道を始めたのです。

権力者たちが十字架につけたこのキリスト、罪人だと宣告したキリスト、ナザレのイエス。それを神さまは復活という、変貌という、栄光のみ姿をもって、この方こそ本当の救い主メシヤであること、キリストであることを証明なさったのだ。だから

「お前たちは悔い改めろ」

と言つて弟子たちは伝道した。

もちろんその前に弟子たちはこの霊(聖霊)を受けたのですが、その記録が使徒行伝というところに出てきます。ヨハネ伝の次の書ですね。使徒たちが伝道して歩んだその記録、それが使徒行伝です。

●どん底での出会い

ひとつひとつが深い深い意味を持っているのです。このちっぽけな聖書にですね。今日だつてヨハネ伝のほんの一部しかお話していません。ですけどすごいですね。

「わたしは自分を与える。活かすものは霊である。肉は何の役にも立たない」

と。生まれながらの我々人間というのは、放物線で見えますならば、若い時は元気だけれども段々と疲れて死んでしまう、こんな(凸の放物線のような)ものだ。しかし、天から降ってくる(凹の)放物線は、こうやってぐんと上がつてゆきます。これは落ちないです、ぐつと昇つてゆきます。いっぺんはどん底を通りますよ。人生、悩んでどん底を通らないと神さまを信じられないですもの。

栄光の道、陽の当たるところを歩んで来た人は、「神さまなんて知らない、信じられるか」と先ず言います。そんなすばらしい栄光の道を歩いてきた人で、「ああ全てが神さまのお陰です」などと言っている学者にお目にかかりたいですね、なかなかないでしょ。実業家でも、「私はこれだけのことをやりました、博物館のひとつくらい建てましょか」と、聞けば立派な人だと思ふけれども、本当に神さまの前に平伏している実業家というのは何人いるか知りません。いたら立派なものです。

だから人間はいっぺんここ(どん底)で苦しんで、どん底を歩むということがものすごい栄光への道なのです。そのどん底を知らないで、いわゆる仕合わせな人生を送った人は、最後はこれ(凸の放物線)ですよ。昔の思い出話ばかりして、過去の自分の栄光だけを頼りにして、寂しく生きてね。けれども、いっぺん苦しんで、本当にこの苦しみのどん底でイエス・キリストという本物にぶつかった人は、今度はキリストがくつついて下さるから、これはもう上昇あるのみです。ただ、この世的に幸福であるかどうか、それは知りませんよ。そんなことは全く問題ではない。



●生きがいのある人生

「お前は大丈夫だよ。わたしがいつも一緒に居る。お前でなければできない仕事がある。わたしと二人三脚でこれから新しい人生を生きるんだ。それを生き抜いた人生は勝利だ。そして、この地上の使命が終ったとき、天に迎える。友だちがたくさん待つっているよ」

と、主は語りかけておられます。

私もきつと先に往って待っているかもしれません。先程サンダーシングの話をしたでしょ。天使たちがさあつと迎えに来るといふ。天国で天使たちはたくさん仕事があるようですよ、この世の人たちを導くために。地上では地上の私たちの仕事があります。いろいろな仕事があります。そのいろいろな仕事は全部、神さまの光に照らされ、神さまのみに支えられ、神さまのご意志に添う、そういう人生だったら、それは生きがいのある人生なのです。本当に有意義なのです。けれども、方向ちがいのことをやっていましたら、どんなに金をもうけようが、どんなに学問的な業績をあげようが、その人は寂しいものです。ですから、こういう本当にちっちゃな本ですけども、この中に、ものすごい宝がひそんでいる。この宝を発掘してほしい。そうすれば、読めば読むほど、人生の経験を積み積むほどこれ（聖書）のすばらしさが輝いてきますから。

私の若い時を知っている連中が、

「先生は変わった」

と言うのですよ。

「どう変わったの」

と聞くと、

「すばらしく変わった。ものすごくすばしくなった」

と言ってくれるのです。昔はそれほど魅力がなかったというのでしょうか。今は人間的にも本当に輝いていると言ってくれるのですね。これはやはり私の中にキリストがお宿りになったから、キリストのみ光が、そのように私を変貌させているのだなあと私は思っています。年齢を重ねれば、人間的には段々衰えるはずですよ。それが何か本当に静かな喜びと申しましょうか、そういうものが湧いてまいりますし、何か不思議な気持ちですね。

●生きている実感

それはそうですよ、永遠の世界とお友だちになっちゃってしまつたら、いわば宇宙をいただきたいというものでしょ。神さまの世界はケチくさい世界ではない。流れて流れて止まない豊かな世界ですから、土地のように取り合ひするような世界ではない。現実生活は苦勞の連続です。苦勞の連続でありながら、しかし、そこに絶えず生命が流れてきますから、歩いてゆけるのです。



私はいま水泳をやっているけれども、まだまだ水になじみません。空気を吸うのに精いっぱいやっていますが、本当に上手な人なら——確かに水泳は体にきついと言いますよ——けれども水に乗って呼吸しながらスイスイ泳いでゆく。つまり、苦しくてもそれが空気を補給され、水に支えられてスイスイ進んでいけるわけですね。

私たちの人生もそうだと思う。苦しみのない人生なんてない。苦しみを避けたらだめです。しかしその苦しみの中に、それにまさる喜びとか、それ以上のものが与えられる。苦しみも何もない人生というのは、ふやけた何の値うちもないものです。やはり人間は、苦しみもまれ鍛えられ、そして光を放っていつて、「本当に私は生きている」という実感がでくる。そういう突破口を開き、チャンスを与えるのがこれ(聖書)ですから。

最後にヨハネ伝の3章、これで終わりにします。

ニコデモという、これは学者でユダヤの宗教的指導者です。この学者が夜こっそりとイエスの所にやって来た。昼間行くとメンツにかかわるので。新人のイエスのところへ名だたるニコデモが教えを乞いに行つたなどというところ、これはもう一門の名折れですから。表向きには行けないので夜こっそりやって来ました。しかし、ニコデモはイエスを本当に尊敬している。「この方はただ者ではない、この方はちよつと違う」と。それで

「あなたは本当に神さまからいらつしやつたお方です。神さまがご一緒でなければあなたが行なつておられるような徴しるし、わざはできるはずがありません」と正直に申し上げた。

●霊的誕生

それに対してイエスは何とおつしやつたか。3節に、

『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わす』
そこでニコデモは驚きました、『私はもう老人です。どうして新たに生まれるなんてそんなことができましようか。もう一回お母さんのお腹の中に入りますか』と。イエスは答えなかつた、『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わす』。

「水」は霊のひとつのシンボルで、「霊によって」ということですね。「人は霊によって生まれなければ神の国に入れないんだ」と。

肉によりて生まるる者は肉なり、

生まれながらの人間、これは「肉」といいます。それはそれだけのことだよと。

霊によりて生まるる者は霊なり』(ヨハネ3：3～6)
と。

「霊によって生まれる者こそ霊的存在者だ。人は霊によつてもう一度生まれなければならぬ。肉の誕生は皆してきた。お母さんに生んでいただいた。今



度はお母さんではない。神さまに、上から、天から、神さまの霊の力でもう一度、霊的に新しい誕生をいただかなければならない。霊によって生まれたらあなたは神の国へ入る、永遠の生命の世界に入る。これをやらなければ、ニコデモさん、それはだめです。いくら学者で偉くても、いくら宗教の知識に精通していても、それはだめです。生命はそんなものではない。本当の生命は上から生み出されるのですよ」

と、これをイエスはおっしゃった。

『新しく生まれるなんて私が言ったからあなたは不思議に思っているけれど、風を見てごらん。風は自分の好きなように吹いているじゃないか、風は己が好むところに吹く。音は聞く。しかし、何処から来て何処へ往くか誰も知らない。全て霊によって生るる者も斯くのごとし』(ヨハネ3・7～8)

●天界と地上の人生

霊によって生まれるということも、これはもう人間が知的に把握したりできるようなことではない。神さまに生み出していただくのだ、不思議なことなのだと。ニコデモはますますあわてまして、

『一体どうしてそんなことが有り得るんでしょうか。イエス答えて言い給う、あんたはイスラエルの先生じゃないか、そんなことが分からないのかね。私は自分の知っていることを言っている。私は見てきたこと

天界のこと、霊界のこと、神さまの世界のこと、

を話している。けれども、あなたがたはなかなか信じない。私がこの地上にかかわること

肉、我々の地上の人生のこと、

を天の光で話したところでなかなか信じない。天のことをもろに話したら、あらわに話したら、とてもじゃない、そんなものは受けとれっこない』(ヨハネ3・9～12)

と、こうおっしゃいました。それから次に大事なことが書いてあります。

「天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし」(ヨハネ3・13)

キリストは祈りの中で、霊において幾度も天界に昇ったり降ったりなさっているのだと思いますね。

●信じる者

「モ―セ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし」(ヨハネ



3・14

これは昔イスラエルの民が出エジプトして荒野の旅をしていました時の話です。イスラエルの民が神さまに背いて、罰としていろいろなひどい疫病にかかった。それでたくさん死んだ。そのときモーセは祈りました、

「どうしてこの民を救えばいいのですか」

と、そうしたら神さまは、

「青銅の蛇をつくり、それを天高く差し上げろ、その青銅の蛇をみたものは癒される」

と不思議なことをおっしゃった。そして事実その不合理なことを信じて行なった者は皆癒された。だけど、「ばかばかしいことだ」といって青銅の蛇を仰がなかった者は病気が治らなかつたと、そういうことなのです。

「この青銅の蛇のように、人の子すなわち私もまた必ず挙げられねばならない」

とおっしゃったのです。蛇は^{のろ}いのしるしなのです。すなわちキリストは人の^{のろ}いを一身に受けてあの蛇の姿、^{のろ}いの姿になると。

「そのことによってあなたがたは^{のろ}いから解かれる。罪の^{のろ}いから、罪の力から、悪魔の力から解き放たれる、私は全部それをひつかぶる」

と。それをここでおっしゃっているのですね。

「モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げられるべし。すべて信ずる者の彼(キリスト)によりて永遠の生命を得ん為なり。」

はつきりと十字架ですね。

それ神は^{ひとり}独子を賜うほどに世を愛し給えり。すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。神その子を世に遣わしたまえるは、世を^{さば}審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。彼を信ずる者は^{さば}審かれず、信ぜぬ者はすでに^{さば}審かれたり」(ヨハネ3・14〜18)

信じない者はすでに^{さば}審かれたと。なぜかという、光が来ているのにその光を拒んでいるからだ。こんなに有り難い神さまの救いが差し出されているのにそれを足げにしている。自分で自分を^{さば}審いているのだよと。さきほども言いました暗黒を自分で選びとっている。光を選びとった人は光に化せられてゆきます。

●光にきたる者

「その^{さば}審判はこれなり。光、世にきたりしに、

光がこの世にやって来たのに、

人はその^{おこない}行為が悪いために、光よりも^{くら}暗黒を愛した。

これが^{さば}審判だと。



すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず。

光のところへ出て行くのは、自分の悪があばかれますからつらいことです。しかし、いっぺんは手術を受けないといけませんものね、手術台の上につて、裸になって罪を除いてもらわなければいけません。それがいやだったらだめだよと。

真^{まこと}をおこなう者は光にきたる。

あるいは光にきたる者は真を行う、

その行為の神によりて行いたることの顕^{あらわ}れんためなり」(ヨハネ3・19～21)
それから少し飛びまして31節、

「上より(天から)来るものは凡^{すべ}ての物の上にあり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。天より来るものは凡ての物の上にあり。彼その見しところ聞しところを証^{あかし}したもうに、誰もその証を受けず。(しかし)それを受けた者は印^{いん}して神を真なりとす」(ヨハネ3・31～33)

すなわち、キリストの言葉を

「しかし、はいそうです」

と。度合は人生経験によっていろいろちがいますよ。だけど本当に、

「キリストの語っていることは本当だ。この人は嘘を言うお方じゃない。誠^{まこと}なるお方である。そのお言葉には偽^{いつわ}りが無い」

と、言葉をその通りに信ずることが人格を信じるということですよ。

●みことばの音楽

友だちだってそうでしょ、「あいつの言うところと当てにならん」っていうことは、その友だちを信じてへんことですものね。「あいつはほんまや、あいつの言うところと本当や」というのは、その友だちを本当に受けとっていることですね。だから、

「イエスというお方が聖書を通して語って下さる、その言葉をそのまま受けます」ということが、イエスという方を信じているということなのです。

「イエスさま、あなたのお話っておられることは本当です。私はまだ臆^{おぼろ}にしか受けとっていないかもしれません。深い意味は分かっているかもしれませんが。しかし、イエスさま！ あなたの語っておられることは本物です。何か分かります。何か感じます。あなたを信じます」

と。「あなたを信じます」ということは、

「あなたのお言葉をそのままいただきます」

ということと一つなのです。そうしますと、イエスの語っておられる言葉が私の中で音楽のように響き出すのです。

「求めよ、さらば与えられん」(マタイ7・7)



「すべて主の御名みなを呼ぶ者は救わるべし」(ロマ10・13)

とか、そういう有り難い言葉がいつぱいありますからね。そういう言葉が全部自分の中にインプットされる(入れられる)のです。そして、それが段々段々メロディのように甦よみがえってくるのです。そのうちに、自分の魂がそのメロディと一緒に生きていくことが段々感じられてきます。そうしたら、何か清らかな空気を吸って、何か気分が好くなって、ルンルン気分になってくる。本当にそうなのです。そして苦しい時には、

「イエスさま！ 助けて下さい。イエスさま！ お願いします。主イエスさま！
主イエスさま！」

と。それでいいのです。「主イエスさま！」と、単純なものなのです。

●いだからである祈り

「主イエスさま！ 私はあなたを信じ、あなたを救い主といたします。どうぞ導いて下さい」

と。「主イエスさま、主さま」と呼ぶとき、実は、主イエスさまから呼びかけられているからこそ、そのように「主さま」と呼ぶことができるのです。「主さま」と呼んだとき、既に主の御懷みふところの中に抱かれてある。「主さま」と呼んだとき、実は主の方が、

「やつと私の呼ぶ声に気づいたね、待っていたよ。お前と私は一つだよ。お前を決して手離さないからね」

と応えていて下さるのです。

「私の中にいなさい。私の中にとどまっていなさい。私の中にとどまっているなら、お前は豊かな実を結ぶようになる。私から離れては、お前は何もほんとうの業わざはできないのだからね」

と。この身このまま、あるがまま、全身を主さまの中に投げかけて、私の中で主さまに働いていただく。

「主よ、どうぞ私の中で働き下さい」

と祈ってゆくことです。

「主よ、私は何者でもありません。何者かであろうといたしません。あなたさまこそが無限無量なるお方です。あなたさまがこの身にお宿り下さり、栄光の御業みわざをなさって下さい。ただ、あなたの聖名みなをたたえます」

と。このような投げ出しの、あけつびろげの祈りを主はよろこび給います。

「然り、汝はわがいつくしむ子、わが心にかなう者、われ汝をよろこぶ」

との主のみ声をききつつ、勇ましく進んで下さい。

(1991年12月22日 四国キリスト召団発行「奥田昌道先生講筵『聖書に初めて接する人のために』」より転載)

